

かたりべ53

豊島区立郷土資料館だより



清和小学校3年生と平田晃さん（2月12日）

《第四回收藏品展》

東京の伝統
「組紐の技と職人」

今年度最後の第四回收藏品展が、二月三日（水）から三月三十一日（水）まで開催されています。館内には、紐を組む時に使った道具がありますが、そのひとつが高台（写真）です。この高台は、職人さんが実際に使っていたものですが、その職人さんが高齢により仕事をやめ、使わなくなったため資料館へ寄贈してくださったものです。高台が資料館に着いた時は解体されていたのですが、平田晃さんが帯締めを組んでいる状態にしてくださいました。平田さんは、現在区内でただひと



りの組紐職人さんです。忙しい合間をぬって来館してくださった時、ちょうど小学校三年生の社会科見学があり、急きょ、組紐体験教室の開催となりました。平田さんの手助けで、子どものしなやかな手が絹糸を操り(?)しました。その真剣な眼差しと紅潮した頬は忘れられません。

これからはこの高台に限らず、資料館にある実際の資料を使って、多くの人に体験学習する機会を提供できればと考えています。

◆ ◆ ◆
ではここで、見学者から受けた質問のうちいくつかについておこたえしたいと思います。

◆展示に組紐を選んだのはどういうわけですか？ 特別展や収蔵品展を通してさまざまな視点から地域の歴史をみてきましたが、今回は、今までとは少し異なる資料(組紐、つまり繊維製品)を素材に展示を試みました。現在、組紐は羽織紐や帯締めに生かされていますが、江戸時代から組紐の生産地として歴史がある東京では、明治後期から昭和一〇年代にかけて最も充実した製品を量産していました。そしてこの時期、豊島区域では、主

に男物の羽織紐を中心に職人さんが互いに技を競い合い、人々の需要にこたえていたのです。なかでも、絹糸を撚り、それを器台にかけて組むという技の発達は、特に豊島区の地域の形成と密接であったと考えられます。ということから、組紐を展示でとりあげたというわけです。

◆展示してある資料はどこの物ですか？ 展示の調査準備段階では、現役の組紐の職人さんをはじめ、元職人さんやその家族の方々にお会いしました。区内ばかりではなく、千葉県、埼玉県にお住まいの方(戦後転居)もいらっしゃいました。人づてに貴重な資料が集まり、「豊島区にゆかりがあるから」という遺族の方のご意向で寄贈していただいたものや、展示期間中に限ってお借りしているものもあります。また、「土山コレクション」(池袋在住土山氏の編集)のように、東京農工大学附属繊維博物館に所蔵されている組紐文化の遺産ともいえるべきものをお借りしている場合もあります。

◆足打台で作った紐はどんな紐ですか？ 館内では各種の器台を展示していますが、そのなかのひとつに足打台があります。江戸時代の絵画や文献をもとに、平田晃

さんが復元したもので、これで武器に使われていた紐の製作を試みていますが、「これだ!というものがまだできない」と控えめで、そのため今回は実物を展示することはできませんでした。実は、二〇年前前から組紐をなさっている女性(宇都宮市在住)が展示の開催を聞き知り来館しました。その方はさまざまな器台で紐を組んでいらっしゃいますが、足打台で紐を組みたいという希望を持ち続けたいらっしゃいました。この展示会がきっかけになり、足打台による紐が完成し、それを展示することができたら・・・と夢がふくらみます。

◆ ◆ ◆ 【展示構成】

- 1 この道一筋
- 2 手仕事に生きる
- 3 生活の脇役
- 4 技を伝える

◆ ◆ ◆ ■東京の組紐職人

◆展示期間等】
・二月三日(水)から三月三十一日(水)まで
・開館時間は午前九時～午後四時半、休館日は月曜日、祝日、第三日曜日、三月二三日
・展示解説は二月六・二〇日、三月六・二〇日、いずれも土曜日、二時から三時 「福岡」

トキワ荘のヒーローたち・2を終えて



昨年11月12日～1月24日に開催した「トキワ荘のヒーローたち・2」展では五三三八名の方が見学されました。

今回の展示では、単なる漫画展ではなく、地域の視点から戦後復興期の一九五〇年代のトキワ荘の時代を、当時の写真や地図から描いてみました。またトキワ荘の暮らしぶりを「四畳半の夢」と題してイメージ展示してみました。これが思わぬ反響を呼び、マスコミの宣伝もあって新潟

・富山・岡山・福岡県などから来館された方もいました。また漫画ファンの若者や家族連れのほか、トキワ荘の漫画家と同世代の50～60歳代の方が、自分の少年・青春時代と重ね合わせて感慨深く見学される姿が多かったのは意外であり、嬉しく思いました。会期中、7歳～88歳まで三六四名の方にアンケートをお寄せいただきました。その一部をご紹介します。

- ◆この展示がトキワ荘に止まらず、彼らの当時の生活をも表わし見せてくれた点、ある種の感動をいただいた。(男45歳)
- ◆素晴らしかった。展示物すべてそっくりそのまま家に持って帰りたいくらいです。展示会が終わるまでまた何度も来てしまおうでしょう。(女22歳)
- ◆各漫画家たちの青春の息吹が感じられた。伴って戦後の復興の一断面が忍ばれた。(男45歳)
- ◆作品の映像化したもの(アニメ・ドラマなど)を流してくれれば、もっとよかったですと思う。(男24歳)
- ◆ものすごく楽しめました。豊島区だからこそできる企画だと思う。(男31歳)
- ◆内容が濃く、地元ならではの資料や素材も多くて楽しめた。(男24歳)

◆財政難の折、この展示作品と構成の努力は評価できます。(男69歳)

◆原画等もっとあればよい。(女26歳)

◆金銭的には貧しいが、夢に向かっていったヒーローたちに心の豊かさを目一杯感じて胸が熱くなった。(女年齢不明)

◆限られたスペースと資料の中で、これだけの「見せる展示」を手作りで開催した関係者の方々の熱意を感じます。(男24歳)

- ◆生活臭が感じられる大変意味深い展示だと思いました。町の写真・地図なども貴重な記録だと思います。(男61歳)
 - ◆通常のマンガ展と異なり、地域や時代に密着した内容が新鮮でおもしろかったです。(男34歳)
 - ◆刊行物が出せないのは非常に残念です。せつかくの良い展示がもつたいたいと常々思っております。(男38歳)
 - ◆12年前のも見ていたら、と残念に思った。地域との関わりがさりげなく盛り込まれていてとても良かった。(女26歳)
 - ◆現在と当時の比較が面白かったので、10年後、20年後に「トキワ荘・3」展をぜひやってほしい。(男33歳)
- ※ご協力有り難うございました。「横山」

退避？・待避？ 〔展示 「穴工襲しと防穴工」 から〕

災害などから身を守る際の「へたいひ」といふと、どの漢字を思いつくでしょう。見出しの二つの語はどういう違いがあるのでしょうか。以下は、昨年夏の展示「空襲と防空」からの一こまです。

戦時中の日本の空襲対策で、「避難」に関しては微妙な変化がありました。

一九三三（昭和八）年の関東防空演習の時には、一般市民は速やかに防護室へ避難することになっていました。戦争が拡大するにつれて避難は老人や子供、病人に限られ、「一般官民は各其現在地に在って防護又は其業務に奮励さすものである」（『改訂 防護団必携草案』一九三六年）とされます。これは、一九四一年一二月の内務省による一般的な空襲時の退去禁止の通牒へとつながります。逃げずに火を消せ、というわけです。お上は避難を許さない

一九四一年三月に内務省計画局から

「少年防空読本」という本が出されました。会話体で書かれている、この本のなかに次のようなくだりがあります。

大人「家を守る人でも、いつ爆風や爆弾の破片などが来るかわからないのですから、中庭に防空壕をつくってその中にはいつてみるとか、防護室にゐるやうにしないでゐるはなりませんね。」

子供「だってお上では避難はお許しにならないんぢやあないの？」

それがなかなかむづかしい

大人「む、それがなかなかむづかしいところだ。大人でもよく取り違へるんだがお上で避難を認めないといふのは、家を捨てて逃げることを許さないといふことで、防空壕の中にゐても、焼夷弾などがおちたらすぐ出て消し止められるのだから、自分の家を捨てて逃げるのとは違ふのだ。これを待避といつてゐるがね。」

ここに「待避」という語が登場します。「待避」の初出は分かりませんが（どな

たか教えてください）、以後、一般的に使われるようになります。

しかし、「大人でもよく取り違へる」ことがなくなつたかどうかは、わかりません。

なお、「退避」でない「待避」は鉄道で追い越しを待つために車両が止まっている線路（待避線）などの場合に使われるようです。〔青木〕

編輯 集束 後記

編集を担当して二年たちました。今回が最終号です。ワープロで書式設定し、見やすさを念頭に試行錯誤しながらやってきました。印刷機は市内のどこのものがよいか探しました。豊島新聞社さんには、途中号から写真製版の援助をいただき感謝申し上げます。新連載ができなかったのが心残りですが、次の編集者へ期待してバトンタッチします。「福岡」

かた り べ

No. 5 3

1999年3月6日

豊島区西池袋2-37-4

電話03-3980-2351

発行／印刷
豊島区立郷土資料館